卒業制作の原画を頼まれたのは、3学期に入ってからだった。前々から有希の絵の才能に目をつけていた教師のひとりが、有希を推薦したのである。卒業式の日に披露されるそれは、全卒業生が参加して制作する巨大な版画だった。テーマは“明るく元気な駒場の子どもたち”。考えただけでも大変な仕事だった。だが、有希は快く引き受けた。テーマが決まっているだけで、あとは自由に描いていいのである。断る理由がなかった。

毎日遅くまで残って描いた。大空に太陽、広いグラウンドにはすべり台やブランコ、そしてその中で遊ぶ子供たち——。描いたことのないほど大きな絵は、構図が思った以上に難しかったが、そのぶんやりがいもあった。

放課後、たったひとり教室に残って、有希は黙々と絵を描きつづけた。

長い冬が終わりを告げ、かすかな春の気配とともに卒業の日が訪れた桜まではほど遠いが、頬を吹き抜ける風はたしかに花の匂いを含んでいた。

卒業式では、事前に提出した卒業生の作文の中からいくつかが選ばれて読まれることになっていた。とにかくめだつことは避けたかった有希は、長渕剛の「乾杯」をもじった作文を書いていた。サビの部分をちょこっと変えるだけて、それ卒業作文にふさわしい内容になった。

ところが、その作文が読まれてしまった。先生方はそれが長渕だとは気づいてないようだった。有希の名前が読み上げられるやいなや、しらけたムードが漂った。結局めだってしまった。腹立たしい思いで有希は作文が読み上げられるのを聞いた。

卒業証書の授与が終わると、いよいよ卒業制作の発表になった。壁に立てかれられた版画にかかった白い布がはらりと落とされた。

「わあっ」

場内からどよめきが起こった。

その巨大な版画には、空と太陽と大地の中で元気に遊ぶ子どもたちが、大胆な構図で生き生きと描かれていた。

原画を描いた有希の名前は公表されなかった。

会場の中でそれを知っていたのは、先生方と有希と、後ろで見守る亮子だけだった。

式が終わった帰り道、亮子はひと言有希をほめた。そして聞いた。

「どこか行きたいところある?」

「喫茶店!」

学校のそばの喫茶店に入り、巨大なパフェを注文した。亮子も同じものを注文した。有希は息もつかずに食べた。

降ってきた雪を眺めながら母とふたりで食べるパフェは、ひんやりと甘くおいしかった。